

## 書評

ハモグリバエ防除ハンドブック  
—6種を見分けるフローチャート付—  
徳丸 晋 著  
A5判, 140頁, 2,160円(税込)  
農文協(2018年7月10日発行)  
(ISBN 978-4-540-15154-5)



ハモグリバエの種の見分け方やよく効く殺虫剤、防除の工夫に関する本が出版されたので、評価を含めた紹介をする。本書は全部で5章から成る。まず序章「ハモグリバエ防除はここでつまずく！」では、殺虫剤をまいたのにハモグリバエが増えてしまうリサージェンス（誘導多発生）やハモグリバエの潜孔が数日で急激に増える現象が記述されており、思わず引き込まれてしまう。

第1章「正体を知れば恐れるに足らず」では、ハモグリバエ科の主要な害虫6種の生態や各種殺虫剤の殺虫効果について概説されている。本章のコラムでは、マメハモグリバエとトマトハモグリバエの交雑実験の結果、前者が雌で後者が雄のときのみ不妊の雌成虫が羽化してきたという、徳丸 晋博士の見いだした現象（Tokumaru and Abe, 2005）が紹介されている。なお、鹿児島大学の坂巻孝孝博士たち（Sakamaki et al., 2005）も同様の結果を得ておられるが、対照的にマメハモグリバエが雄でトマトハモグリバエが雌のときのみ雑種の不妊雌成虫が羽化してきた。種間交雑の問題は研究者の挑戦を待ち受けている。

第2章「ここがポイント！発見・判別と防除法」では、

簡易識別フローチャートを見ればハモグリバエ6種の同定がある程度は可能であるが、正確な同定には雄成虫の生殖器の観察が必要であると強調している。簡易識別を示すだけで終わらなかったところに、徳丸 晋博士の力量が現れていると思う。

第3章「これなら防げる！ハモグリバエ・虎の巻」では、物理的防除、化学殺虫剤による防除、寄生蜂による生物的防除の順番で有用な情報が要領よく説明されている。京都府の現場での経験が活かされており、説明はわかりやすい。なお、ハモグリバエの幼虫に寄生するヒメコバチ2種では、寄生や寄主体液摂取を伴わない刺針のみによる殺虫効果も認められる。

ナモグリバエはトマトなど果菜類の葉をほとんど加害しないが、その幼虫の寄生蜂はマメハモグリバエやトマトハモグリバエ等にも寄生する。そこで、野外でナモグリバエに加害されているエンドウマメの葉を、トマトを栽培している施設に持ち込み、ナモグリバエの幼虫寄生蜂をトマトで発生させてハモグリバエの防除に使う方法が紹介されている。この土着天敵を利用するアイデアは秀逸なので、その科学的根拠となる論文の発表が望まれる。

第3章のコラムでは、青い可視光の殺虫効果という大発見がわかりやすく紹介されている。人間の目には見えない紫外線が生物に悪影響を及ぼすことはよく知られていたが、東北大学の堀 雅敏博士たち（Hori et al., 2014）は、青い可視光がキロシヨウジョウバエを殺すことについて明らかにした。その後、ハモグリバエに対する殺虫効果も確認されたという。青い光を当てるだけという画期的な防除技術の開発に、現在、期待が集まっている。

第4章「品目別 防除マニュアル」では作物ごとに、まず「診断のポイント」が簡潔に示され、次に圃場管理の注意点とともに、播種から収穫後まで栽培の段階によって異なる防除の注意点が述べられている。「初発時」、「多発時」、「激発時」の対処法も示されているので現場では役立つに違いない。これらの情報をまとめるには並々ならぬ努力を必要としたであろう。

要約すれば本書は、主要な害虫ハモグリバエ6種に焦点を当て、その生態や防除技術から最新の研究まで網羅した、現場で役に立つ本である。

(九州大学大学院比較社会文化研究院 阿部芳久)